

雑学 鳥獣植物戯詩

第18回 【夕立と露の葉】

全24回

八木幹夫

浮世絵はその色合いや構図の美しさに眼を瞞るものがある。歌川広重は江戸後期の浮世絵師だが、今でいう流行のデザイナー。雨の景色はいくつかあるが「大橋あたけの夕立」（名所江戸百景）は興味深い。絵師の元絵は勿論、彫師、摺師の三者の技術によって元絵、版木、刷りの工程を経てあの絵画ができあがる。篠突く雨というが大粒の水の玉が落ちてくる。絵の中では雨が斜めに交差し、その線描が画面を支配しつつも細部の風物を邪魔しない。遠景の空や近景の水のぼかしも見事だ。水嵩の増してきた川を筏師が目一杯手をのぼし材木をあやつる。橋の上を傘や筥を傾け右に左に小走りに行く人々。雷や雨音や人々の声が聞こえてきそうだ。

ふと江戸の人々の時間を思い遣る。今私たちが生きていく時空が貧相に思えるほど、浮世絵に描かれた時間は豊かだったのではないか。渡し場の俄雨に大きな露の葉を頭にのせ、走る光景もあつた気がする。

ちと一本拝借するぜ 露の葉を傘に旦那は雨の花街

*八木幹夫歌集『青き返信』（砂子屋書房）より